

令和 8 年 度
宮崎国際大学 国際教養学部
指定校推薦

試 験 問 題
【小 論 文】

受 験 番 号
氏 名

次の文章は、哲学・倫理学の研究者である古田徹也^{ふるたてつや}さんが、庵功雄^{いおりいさお}氏の著作『やさしい日本語』を引用しながら、〈やさしい日本語〉について述べたものです。文章中に書かれている〈やさしい日本語〉の意義^{いぎ}について要約しなさい。また、あなたが日本語ネイティブではない人とコミュニケーションをとる場合、具体的にどのようなことを心がけたいと思いますか。要約と合わせて600字以内で述べなさい。

※ 文章中の引用文は全て『やさしい日本語』による

日本語学・日本語教育学者の庵功雄さんが著した『やさしい日本語』は、簡略化された〈やさしい日本語〉の概要を示しつつ、社会におけるその重要性を指摘しており、非常に参考になる著書だ。

そこで提唱されている〈やさしい日本語〉とは、簡単にまとめるならば、(1) 語彙を絞る、(2) 文型を集約するなどして文法を制限する、(3) 難しい表現を噛み砕く^か、といった方法により、特定の障害のある人や在日外国人などにとっても習得や理解がしやすいように調整された日本語のことだ。

この〈やさしい日本語〉は、災害時における行政やメディアによる広範な情報発信という用途のほか、平時においても、多様な人々が暮らす日本の地域社会の共通言語として用いることによって、社^{※注1}会的包摂や多文化共生につながることを目指されている。具体的には、たとえば、

「地震直後に必要となる水や保存食はもちろんのこと、給水車から給水を受けるためのポリタンク等も事前に購入しておきたい」

という日本語ネイティブ向けの防災の呼びかけは、

「地震のすぐあとのための水や食べ物はとても大事です。水をもらうときのためのポリタンク（水を入れるもの）も買ってください」

といった文章に言い換えることが推奨される。

同書中で紹介されているエピソードの中で特に印象深いのは、聴覚に障害のある一人の男性のエピソードだ。彼はろう学校で必死に日本語を学んだが、彼の母語である日本手話が日本語と大きく文法体系が異なることなどもあり、敬語の使い分けや助詞の使い方などはうまく習得できなかった。就職後、彼が「てにをは」の不自然な文——たとえば、〈仕事が終わらせる〉など——を書いたりすると、周囲の同僚にからかわれたり、蔑^{さげす}まれたりするようになり、相当の辛苦を味わったという。同様のつらい思いは、日本で働く在日外国人なども少なからず経験していることだろう。

日本語を母語とする者が高度に使いこなしているものを皆が従うべき「規範」として立て、そこから逸脱した使用を嘲^{あざけ}ったり厳しく注意したりするのでは、社会的包摂や多文化共生からは遠ざかるばかりだろう。むしろ、「日本で安心して生活するために最低限必要な日本

語」を基準に皆が日本語の学習やコミュニケーションのあり方を考えていくことは、特定の障害のある人や在日外国人などが「日本の中に自らの「居場所」を作る」ことにつながりうる。

以上の指摘は非常に重要だ。〈やさしい日本語〉を知恵を絞って構築し、日本語教育の現場などに普及させて日本語習得のハードルを下げることは、たとえば移民など、この国の地域社会で生きていく必要のある人々にとっても、また、彼らと共生していく日本語ネイティブの住民にとっても有益であることは間違いない。

さらに同書では、〈やさしい日本語〉はそのほかの点でも日本語ネイティブ自身にとって大いに恩恵があると指摘されている。私も含め、日本語ネイティブはしばしば、「「適当に言っても通じる」というある種の「甘え」」のなかにいる。たとえば、企業でも官庁でも大学等々でも、自分でもよく分かっていない曖昧な業界用語を^{※注2}符丁のように用いて、仲間内でうなずき合って過ごす、というのはよく見られる光景だ。また、無駄に難しい言葉をこねくり回して立派な話をしているように見せかける、というケースもしばしばあるだろう。

そうした甘えや幻惑から脱して、自分とは異なる背景を有する相手の立場に立ち、物事を分かりやすく表現して伝えようとすることは、多くの場面でコミュニケーションの成功の機会を増やしてくれるほか、物事のより明確な理解や、より多角的な理解を促進してくれるだろう。

※注1 社会的^{ほうせつ}包摂 … 社会的に弱い立場にある人々も含め、社会の一員として取り込み、支え合う考え方のこと。

※注2 符丁^{ふちよう} … 特定の仲間以外には分からないように仕立てられた言葉。

(古田徹也『いつもの言葉を哲学する』による・一部省略がある)